論　説

主従関係のアサビーヤ

——イブン・ハルドゥーンの王朝論における非血縁的結合の分析——

荒　井　　悠　太

は　じ　め　に

本論は，14世紀のアラブの歴史家・思想家イブン・ハルドゥーン（1332–1406）の史書『省察すべき実例の書，アラブ，非アラブ，ベルベル及び彼らと同時代の偉大な支配者達の初期と後期の歴史に関する集成』*Kitāb al-ʻibar wa dīwān al-mubtadaʼ wa al-khabar fī ayyām al-ʻArab wa al-ʻAjam wa al-Barbar wa man ʻāṣara-hum min dhawī al-sulṭān al-akbar*（以下『実例の書』*Kitāb al-ʻibar* と略称），及びその第1巻「序説」（邦題『歴史序説』）*al-Muqaddima* と，『実例の書』末尾に付された『イブン・ハルドゥーン自伝——彼の東西の旅行の記録』*al-Taʻrīf bi-Ibn Khaldūn wa Riḥlati-hi Gharban wa Sharqan*（以下『自伝』*Taʻrīf* と略称）(1) の分析を通じて，彼の王朝論と歴史叙述の関係を再考するものである。とりわけ本論では「主従関係のアサビーヤ」という概念に焦点をあて，従来しばしば血縁的・部族的モデルとしてのみ理解されてきたイブン・ハルドゥーンの王朝論における非血縁的側面を再評価することを試みる。

イブン・ハルドゥーンは自身の史書『実例の書』の「序説」において，「人間文明の学問 ʻilm al-ʻumrān al-basharī」（以下「文明の学問」）という独自の社会理論を提唱した。これは，砂漠・田舎 badw と都市 ḥaḍar の関係に基づく循環史観的な王朝交代論と，その過程において人間社会に生起する生計手段 kasab，技術 ṣināʻa，学問 ʻilm 等の様相／状態 ḥāl, pl. aḥwāl の推移に関する考察を併せた複合的な文明論の一

種といえる。彼は,「アサビーヤ‘aṣabīya」という心理的要因によって強力な紐帯を有する「アサビーヤの人々／連帯集団ahl al-‘aṣabīya / ‘iṣāba」（以下「連帯集団」）は砂漠的文明 al-‘umrān al-badawīの状態では王権を求めて互いに抗争し，そのなかから強力な支配者集団があらわれて王朝を創設する。王朝の支配者は大規模な動員力によって都市を建設し，定住化が進み技術水準が向上する。これが都市的文明al-‘umrān al-ḥaḍarīへの移行である。その結果として現れる奢侈tarafによって人々は柔弱となり，王朝草創期に存在した支配者集団の強固なアサビーヤは次第に失われる。やがて支出の増大によって王朝は荒廃し，最終的には新興の王朝に取って代わられる(2)。

イブン・ハルドゥーンは「文明の学問」において，アサビーヤを人間社会や王朝の様相の変化を誘発する動因／作用因efficient causeに相当するものと位置付けた(3)。アサビーヤとは，主に部族・血縁集団の構成員の団結を促すとされる，社会的紐帯をもたらす一種の心理的要因である。彼は「序説」において，強力な血縁意識あるいは部族意識に基づくアサビーヤを有する部族qabīlaのみが，他の集団を従属させて王朝を樹立できると説いた(4)。彼の王朝論はしばしば「部族的」と形容されてきたが，それは彼が王朝創設における部族的紐帯の重要性をきわめて重要視したためである(5)。

研究動向と問題点

イブン・ハルドゥーンは「序説」において，王朝創設プロセスにおける血縁・系譜nasabに基づくアサビーヤを重要視したが，これは多くの先行研究におけるイブン・ハルドゥーンの理論の理解にも反映されてきた(6)。社会学・人類学の分野ではE. ゲルナー(7)やS. F. アラタス(8)，歴史学においては「文明の学問」をイブン・ハルドゥーンと同時代の諸学問から構成された「結節点」と捉えるアズメフ(9)等が広く知られる例であろう。だが本論では，イブン・ハルドゥーンの王朝論を単に「部族的」と捉える見方のはらむ問題点を以下に二点指摘したい。

第一は,「文明の学問」の王朝論をモデルとして用いる近年の研究

のほとんどが，彼の枠組みを王朝創設モデルとして用いていることである。これは，王朝の盛衰プロセス全体を射程とする「文明の学問」から，王朝成立段階までのプロセスを部分的に取り出していることを意味する。このような手法が採られるのは，成立後の王朝は当初有していた部族のアサビーヤを喪失してゆくのみであり，そのプロセスはもはや「部族的」とは形容し得ないからというのが理由であろう。

上記のような手法から，第二の問題が派生する。王朝創設以降のプロセスを捨象した結果として，その後にあらわれる王朝内の集団や人的結合の変容にかんするイブン・ハルドゥーンの見解が看過されている点である。

「序説」において，イブン・ハルドゥーンが王朝の衰退を支配集団のアサビーヤの喪失と関連付けて説明していることは事実である(10)。だが逆に，喪失すると明言されているのはあくまで王朝創設当初の支配者集団のアサビーヤのみであり，それ以外の集団についても同様であるとは限らない。そして，支配者と王朝内外に存在する様々な集団との関係性のあり方は，血縁や部族関係だけで説明されるものではないはずである。例えば国家建設と部族の関係に関するラピダスの古典的研究では，中東・北アフリカ地域における前近代の征服運動において，実際の血縁・親縁は原動力としては二次的であり，部族はより多様な集団を包摂する観念的な枠組と見做されている。さらに征服運動が国家形成へと変容する際には，この部族的軍事力も軍事奴隷と官僚に取って代わられると論じられる(11)。「文明の学問」では部族が主要なモチーフとして用いられているが，同時に王朝創設後の展開についてもイブン・ハルドゥーン独自の見解が示されており，マグリブに限らず，執筆時期・典拠史料ともに異なるさまざまな歴史的事例が提示されている。彼の王朝論を単なる部族的王朝論としてのみ理解することは，王朝衰退のプロセスを支配者集団のアサビーヤの強弱のみで単線的に把握することにつながり，結果としてイブン・ハルドゥーンの理論が本来内包している非血縁的な人的結合のかたちを十分に把握できないおそれがある。

以上の点を踏まえ，本論では，非血縁的なアサビーヤの要因として「主従walā'」の機能に着目する(12)。Walā'という語には幾つかの用法が存在するが，元来は非部族構成員を部族社会に参与させる際に適用される，アラブ人保護者と非アラブ'ajam系被保護者との関係性を指すものであった。この関係に関わる人物がmawlā, pl. mawālīである。ウマイヤ朝時代以降，マワーリーは有力者の私兵・臣下として政治・軍事に参与し，アッバース朝時代に入るとカリフのマワーリー依存がより進行していった(13)。筆者は荒井2017において，『実例の書』におけるwalā'もまたほとんどの場合，非部族的・非血縁的な主従関係を示しており，またこのような主従関係に基づくアサビーヤ'aṣabīya bil-walā'を，アサビーヤ理論から系譜や血縁，部族といった制約を外すことを可能とする概念であると論じた(14)。本論ではこの概念を軸として，従来着目されてこなかった王朝成立後における人的結合の変容，およびそれらにかんするイブン・ハルドゥーン自身の具体的記述に焦点をあてる。

本論の構成は以下の通りである。第1章では，アッバース朝期までの記述を主な対象として，イブン・ハルドゥーンの歴史観と叙述における非血縁的結合の重要性を検証する。

第2章では，『実例の書』におけるマムルークおよびマムルーク朝の記述に焦点をあて，血縁・部族集団ではないマムルークという集団とその王朝が，いかにしてイブン・ハルドゥーンの王朝論に組み込まれているかを構造的に把握する。以上の分析を通じて，『実例の書』にみられるイブン・ハルドゥーンの王朝観を非血縁的結合という観点から俯瞰的に提示する。

第1章　アッバース朝以前における支配者集団の移行と人的結合の変容

1.1「アラブのアサビーヤの消滅」と非アラブ集団

本章では，『実例の書』におけるアッバース朝以前の諸王朝にかんする記述を基に，王朝成立後における人的結合の描写を分析する。

イブン・ハルドゥーンは「序説」において，王朝の一般的な盛衰

プロセスを以下のように述べる。まず，王朝には自然の寿命‘umrがあり，それは人間の一世代を40年としてその三世代分，およそ120年であるとする。第一世代の人々には砂漠的性質と支配集団のアサビーヤが強く残っているが，第二世代ではそれらが次第に弱体化し，支配者の連帯集団は外来の家臣に取って代わられる。第三世代では人々の間に都市的性質と奢侈が蔓延し，その結果として軍事力が失われる。三世代の間に衰弱した王朝は，第四世代以降，「神が消滅を許し給う時」まで続くとする(15)。

また彼は，「ある王朝が滅亡しても，その民族にアサビーヤが残存していれば，王権は必ずその民族の別の集団に移る」という命題を挙げている(16)。これは，アサビーヤには部族qabīlaおよびその下位集団である(17)系譜集団を単位とするものと，それを包括する上位区分である民族sha‘b単位のものが併存しており，民族単位のアサビーヤが消滅したときに，支配民族そのものの交代が生じることを意味している。

『実例の書』におけるイスラーム史をみると，このような民族単位のアサビーヤとして最初に現れるのは，クライシュ族のアサビーヤを包摂する「アラブのアサビーヤ」である。イブン・ハルドゥーンは，ウマイヤ朝初代カリフ・ムアーウィヤ（在位661–680）こそがアサビーヤによって王権を獲得した最初のカリフであるとする(18)。以降，アラブのアサビーヤはしばらく存続したが，アッバース朝の創設後暫くして大きな変化が生じたとされる。「序説」には，「アラブのアサビーヤはムウタスィム［第8代カリフ・在位833–842］とその子ワースィク［第9代カリフ・在位842–847］の治世に腐敗した。その後，アッバース家は彼らのマワーリーに過ぎなかったペルシア人，トルコ人，ダイラム人，セルジューク族，その他の人々に援助を求めた」とある(19)。イブン・ハルドゥーンはここで，王朝の支配集団がアラブ以外のマワーリーに交代し，カリフと連帯集団の間では，人的結合の形態が当初の部族的・血縁的なものから主従関係に変化したとの見方を明らかにしているのである。

歴史的事実に照らしてみれば，ムウタスィムは軍制改革によって

非アラブ系の軍団を創設した人物であるし，彼の前任である6代カリフ・アミーン（在位809–813）と7代カリフ・マアムーン（在位813–833）の抗争を通じてもイラン系の人々が影響力を拡大したことはアヤロンによって示されている[20]。そもそもアッバース朝創設運動自体もイランのホラーサーンに興ったものであるから，アッバース朝は当初よりイラン系を中心とするアラブ系以外の支持基盤を有しており，王朝の支配層にもマワーリーが存在していた[21]。それにもかかわらず，イブン・ハルドゥーンはムウタスィムがアラブの没落を決定的なものにしたと見做す。裏を返せば，アラブのアサビーヤはムウタスィム期まで存続したということである。このようにムウタスィム期を一つの画期とする見方は，イブン・ハルドゥーンと同時代の歴史家達の間にはある程度共有されていたようである[22]。

また，イブン・ハルドゥーンがアッバース朝の盛衰を四つの段階に分割して叙述している点にも着目したい。「アラブのアサビーヤの腐敗」はその第一段階と第二段階の画期に位置付けられており，続く第二段階以降も「序説」で示されるような王朝衰退の各段階におおよそ対応し，各段階の状態を反映した題名が付けられている。第二段階は「内乱と近臣達の専横，諸地方における総督達の自立による王朝領域縮小の時代の，ムンタスィルからムスタクフィーまでのアッバース家のカリフ達に関する報告」[23]，第三段階は「ムスタクフィーからムクタフィーまでの，ブワイフ家と彼らの後のセルジューク族の王朝によって傀儡とされたアッバース家のカリフ達，及びバグダードとその諸地方における彼ら固有の諸状態に関する報告」[24]，第四段階は「ムクタフィーの死，ムスタンジドのカリフ位。王朝が衰退し，その領域がモースル，ワースィト，バスラ，フルワーンの間の地域に縮小した状況下にあって，彼はアッバース家のカリフ達のなかでも支配を独立して行った最初の人である」[25]と題されている。

以上の区分方法から看取されるように，イブン・ハルドゥーンはアッバース朝を①アラブのアサビーヤ健在期，②王朝内の非アラブ系マワーリーの台頭期，③外来王朝による傀儡化期，④最後の独立

期という四段階で捉えているのである。またブワイフ朝・セルジューク朝史もアッバース朝史とある程度関連付けられ，アッバース朝の盛衰プロセスのなかに位置付けられている。

但し，アラブのアサビーヤが衰退して以降に影響力を持った非アラブ系集団については，「非アラブ」はあくまでアラブ以外の複数民族の総称であるため，それらを包括する「非アラブのアサビーヤ」といったものはみられない。アッバース朝期以降，「アラブ」に対置されるような支配民族として現れてくるのは「トルコ Turk」である。

トルコ系の奴隷軍人や傭兵を指す atrāk の語はアッバース朝史の叙述に既にみられるが，支配民族としての「トルコ」が本格的に現れるのはセルジューク朝史以降である(26)。しかしセルジューク朝は形式上アッバース朝に臣従する形を取っていることから，イブン・ハルドゥーンは彼らの王権を不完全なものと見做している(27)。「トルコ」が独立した支配者集団と見做されるのは，マムルーク朝史以降である(28)。イブン・ハルドゥーンはトルコ系マムルークを，不信仰者であるモンゴルの侵入に対抗して神が遣わした人々であり，購入された奴隷でありながら，同時に砂漠的性格を有する人々としている(29)。また，マムルーク朝の起源がアイユーブ朝にあるとも述べて両王朝の間に連続性を見出し，とりわけアイユーブ朝末期のスルターン・サーリフ（在位1240–1249）による大規模なマムルーク増員を重視している(30)。詳細は第 2 章で論じるが，これらマムルークもまた，アイユーブ朝期に外来の集団として王朝内にもたらされ，最終的に王権を獲得したという見方がされているのであろう。

以上のことから，イブン・ハルドゥーンはイスラーム史を「アラブのアサビーヤ」の時代から，非アラブ系諸集団の台頭を経て「トルコのアサビーヤ」が支配的な時代に移行するプロセスとして把握していることが窺える。

1.2　非血縁的結合の構造：カリフ・スルターンとマワーリー・マムルーク

前節では，イブン・ハルドゥーンがイスラーム時代の王朝史を，

王朝の交代を通じた支配民族の交代プロセスと捉えていることを示した。このプロセスにおける非血縁的結合の位置付けをみると，それは支配者（カリフ，スルターン）と外来集団（マワーリー，マムルーク）の主従関係という形であらわれ，やがて外来の集団が王朝内で台頭し，次の王朝創設につながる契機と位置付けられる。本節では，主従関係によって結びつく集団の性格を「主従のアサビーヤ」概念を用いて分析する。以下に挙げるのは，その最初の事例であるアッバース朝のマワーリーに関する描写である。

> アッバース家はマフディーとラシードの時代に，彼らに奉仕するトルコ人，ベルベル人，ルーム人のマワーリーからなる家内集団biṭānaを獲得した。彼らは祝祭，参詣，戦争，遠征に際して支配者を警護する行列を満たし，また平和な時代にあっては支配者を飾り立てた。彼らは支配者の連帯集団として緊密であった…。
>
> トルコ人の名前はアラブ人にとってまったく奇異なものであったので，彼らはアラブ人に従った［名前を付け］，アラブ人の中に参入していった。当時のムスリム達の遠方における戦争は，国境を接するトルコ人に対するもので，彼らに対する遠征は継続的に行われた。あらゆる方面から捕虜の波が次々と押し寄せた。［私（イブン・ハルドゥーン）が］思うに，カリフ達は自らの意図を完遂し，自らの連帯集団を結集させるに際して，高位のマワーリーを廷臣，軍司令官，騎兵隊長などに選抜しようとしたのであろう…(31)。

まず，アッバース朝のマワーリーが「支配者の連帯集団」と明記されている点に着目しなければならない。イブン・ハルドゥーンは「序説」においては「支配者は自身の連帯集団を遠ざけ，マワーリーや従臣の助けを求める」という命題を提示しているが(32)，ここではマワーリー等に相当する「外来の連帯集団al-‘aṣā’ib al-khārijīyūn」(33)もまた，支配者自身の連帯集団として扱われていることが分かる。

加えて先の記述からは，イブン・ハルドゥーンが「マワーリー」と呼称する集団の内実をいかに認識しているかが見て取れる。彼は

アッバース朝におけるマワーリーの起源を，戦争捕虜として到来した人々に求めている。彼らは王朝に奉仕する過程で，次第に支配層に参入していった人々である。

以上のように非アラブ系マワーリーをアッバース朝カリフの「連帯集団」と捉える場合，イブン・ハルドゥーンの理論における砂漠・都市の関係にも一つの注目すべき変化が認められる。原則として，彼の理論における連帯集団とは砂漠的状態，すなわち中央権力に対置される周縁にあって，相互に王権を競う集団のことであり，各集団は主として部族的紐帯に基づくアサビーヤを有するはずであった。しかし先の記述では，マワーリーの連帯集団は明らかに中央権力の側に存在している。またイブン・ハルドゥーンは続けて述べる。

> …やがてトルコ人は調練のなかで互いに競い合い，野蛮さの皮膚を脱ぎ捨て廷臣の繊細さ riqqa と洗練された性質 malakat al-tahdhīb へと脱皮した。［カリフ達は］彼らを奉仕のために組織し，諸官職に取り立てた…(34)。

このように，マワーリーは「連帯集団」と位置付けられる一方で，砂漠的状態において備わっているはずの野蛮さや勇敢さではなく，繊細さや洗練といった都市的状態に備わる性質によって特徴付けられる人々とされている。

以上がアッバース朝の第一段階の末期から第二段階にかけての状況である。この段階までの非アラブ系集団は独立した王権を持たない王朝内部のマワーリーが主であったが，次の第三段階ではブワイフ朝とセルジューク朝，すなわちそれ自体で独立した王権を有する支配集団があらわれ，アッバース朝カリフを「傀儡化 istibdād」(35)する段階とされる。「序説」では，彼らは「アッバース家は彼らのマワーリーに過ぎなかったペルシア人，トルコ人，ダイラム人やセルジューク族，その他の人々に援助を求めた」(36)というように他のマワーリーと列記されているが，自身の王朝を有するダイラム人・セルジューク族を同様にアッバース朝カリフの連帯集団と見做しているのか否かは判断が難しい。

この両王朝の場合，イブン・ハルドゥーンはアッバース朝との関

係をアサビーヤの概念を用いて示しておらず,「傀儡化」の概念もアサビーヤによって説明されるものではない。ブワイフ朝とセルジューク朝の時代には既にアラブのアサビーヤは失われ，アラブの王権が支配的であった時代は終わっているとすれば，アラブ以外の集団から王権保有者が出現するのは自然なことと考えられるのであろう。

またイブン・ハルドゥーンは，ブワイフ朝君主ムイッズ・アッダウラ（在位945–967）と配下のトルコ人マワーリー，およびアイユーブ朝スルターン・サーリフ（在位1240–1249）とマムルークの関係についても，アッバース朝カリフとマワーリーの関係と共通する構造を見出している。

> …ムイッズ・アッダウラは自身の連帯集団である軍司令官達と郎党達，その他の(37)［統治を］分け持つ人々に，支配地にあるすべての村落の管理を割り当てた。…
>
> やがてムイッズ・アッダウラは，トルコ人マワーリーの増員を望んだ。それは彼の民（ダイラム人）の誇りを挫くためであった。彼はトルコ人マワーリーに俸給を定めイクターを増加させた。…(38)
>
> サーリフ・ナジュム・アッディーン・アイユーブは，王朝を防衛し王権の象徴を高めるために，連帯集団を増加させようと欲した。彼はバグダードのアッバース朝の末期のように，マムルークを獲得して増員し始めた。…(39)

以上のように，イブン・ハルドゥーンはアッバース朝史の記述において，カリフの連帯集団が王朝創設当初のアラブ人から外来のマワーリーへと移行する様を描き出している。さらに，ブワイフ朝やアイユーブ朝においても同様に，君主が外来の集団を連帯集団化するという構造を見出しているのである。

小結論

本章では,『実例の書』におけるアッバース朝期までの記述を取りあげ，非アラブ系マワーリーおよびマムルークの事例から，連帯集団の性格の変化を検討した。その分析結果は以下の二点に集約され

よう。すなわち，①支配者と主従関係にある外来の集団についても，主従関係に基づくアサビーヤの概念が適用され，「連帯集団」と位置付けられる。②支配者と主従関係にある連帯集団は，王朝創設以前の砂漠的状態にあるものとは異なり，中央＝都市の側に存在する。

以上の点から，イブン・ハルドゥーンの王朝論を単に血縁的・部族的なものとする見方に修正を施す必要があることは明らかである。先に言及したように，イブン・ハルドゥーンによるアッバース朝史の四つの区分は「序説」に示された王朝盛衰プロセスの各段階と概ね一致しているが，そのなかで生じる支配者集団のアサビーヤの喪失は，単なる喪失としてではなく，血縁・部族的紐帯から主従関係への移行として歴史的意義を付与されているのである。

第2章　非血縁的支配集団：『実例の書』におけるマムルークとマムルーク朝

前章では，アッバース朝期までの各王朝を対象としたが，これらの王朝はいずれもクライシュ族のウマイヤ家とアッバース家，ブワイフ家，セルジューク族など，部族や家系を単位とする特定の支配集団を有していた。しかし本章で取りあげるマムルーク朝は，（マムルーク家系間の通婚や世襲がみられたとはいえ）マムルークという支配者集団自体が非血縁的・非部族的性格を有するという点で，それ以前の王朝とは根本的に異なっている。このため，マムルーク朝は，血縁や部族的紐帯を重視するイブン・ハルドゥーンの王朝論とは相容れないように思われる。マムルーク朝の政治体制とイブン・ハルドゥーンの王朝論の関係を論じた研究は僅少であるが，E. ゲルナーは『イスラム社会』において，イブン・ハルドゥーンの「部族的」王朝論と「非部族的エリート」に基盤を置くオスマン朝およびマムルーク朝の体制を関連付けることを試みた。彼は，部族的紐帯に依存する部族王朝を前近代における王朝の一般的形態とし，オスマン朝およびマムルーク朝の体制をその「もっとも発達し，かつ洗練された形態」，すなわち支配エリートの人為的創出によって部族的紐帯からの脱却と王朝の延命に成功した形態と見做した(40)。ゲルナーに

よれば，イブン・ハルドゥーン理論における非部族的雇われ人や奴隷軍団は本来王朝の老衰という病を悪化させるだけのものであり，オスマン朝だけが，人材供給方法の変更によって例外的に王朝の延命に成功したという(41)。

しかし，ゲルナーの以上の議論はあくまでオスマン朝に主眼を置いたもので，マムルーク朝はオスマン朝と共通する非部族的エリートの王朝ということで二次的に言及されているに過ぎず，彼は『実例の書』のマムルーク朝史部分も検討していない。だが厳密にいえば，マムルーク朝の支配者層はオスマン朝とも異っており，部族的紐帯から脱却したのではなく，元から部族的紐帯を持たないのである。こうした特徴のあるマムルーク朝の歴史を記述するに際して，イブン・ハルドゥーンは「文明の学問」の枠組みとの関連付けをなし得たのであろうか。以上のような問題意識のもと，本章では『実例の書』第5巻と『自伝』の一部にみられるマムルーク朝関連の記述を分析し，イブン・ハルドゥーン自身のマムルークおよびマムルーク朝観の再構築を試みる。

第1章において，イブン・ハルドゥーンはマムルーク朝の起源をアイユーブ朝に求めていることを指摘した。本章ではまずこの点を掘り下げ，アイユーブ朝からマムルーク朝への移行がどのように説明されているのかを検証することから始める。

まず，マムルーク朝創設のアクターであるマムルークという集団の性質について，イブン・ハルドゥーンの描写を検討する。

> …やがて［アッバース］朝が都市的状態と奢侈に耽溺し，困難と無力の衣を纏ったとき，タタールの不信仰によって王朝は狙われた。彼らはカリフの玉座を滅ぼし，諸国の光輝を消し去り，信仰を不信仰と取り替えてしまった。…
>
> …故に，至高なる神――彼に称賛あれ――が再び目配せをして下さったおかげで，信仰が存続できたことは正に神の恩寵である。エジプトのムスリムがその地で秩序を保ち，城壁を防衛したことで，また神が彼らのもとに溢れんばかりのトルコ系諸民族と諸部族，防衛者たるアミール達，誠実なる援助者達をお送

り下さったおかげで持ち直すことができたのである。トルコ人は戦争の家からイスラームの家へ，購入を通じて連れてこられた。彼らの柔弱さは隠れており，諸性質は砂漠的であった。諸性質を卑しさが汚しておらず，奢侈の汚れが混ざっておらず，都市的習慣が蝕んでおらず，豊かな奢侈が性格の激しさを損なうこともなかった。

やがて，al-Qaṭā[42]等の目的地へと派遣されていた商人達が，トルコ人を連れてエジプトへとやってきた。王朝の人々はトルコ人を検分したが，［彼らの］真価からはかけ離れたもの（金？）によってその価格を競い合った。彼らの目的は単にトルコ人を服従させることisti‘bādではなく，まさにアサビーヤによる団結，勇気による荒々しさ，防衛のアサビーヤal-‘aṣabīya al-ḥāmīyaを希求することであった。王朝の人々は，彼らの民族や部族の持つ性質を喜ばしく思い，その全員を選抜した。その後トルコ人は王権を求めるのを諦め，忠実さ，養成所での教育，マドラサでのクルアーン読誦，教育の経験を身に着けた。やがて彼らの勇気は強まり，弓術，教養，広場での競馬，槍術，剣術で頭角を現した。彼らの勢力は強まり，性向は強固になり，王朝の人々に対抗し，決起することを決心した。…

トルコ人達がそうした極みに達すると，王朝の人々は彼らの俸給を倍増し，イクターを豊富に与え，適切な武器と馬の給付を定め，先のような目的のためにトルコ系民族を増員することに決めた。…[43]

以上の記述には，エスニシティとしての「トルコ人」の性質と，人工的な集団としての「マムルーク」の性質が混在している。まず，彼らが生来持つアサビーヤと勇気は「民族や部族の持つ性質」，すなわちトルコ人の状態が砂漠的であることに起因すると見做されている。しかしその一方で，彼らは購入された時点で一度王権を追求することを諦め，マムルークとして支配者に服従し，教育を受けたとされている。この点は，人為的に組織された社会集団としての性質に相当する。

ここで重要な点は，ある外来の集団が王朝内に導入されて人為的に組織・教育を施され，最終的に支配層に参入するというプロセスに，アッバース朝における非アラブ系マワーリーの事例と構造上の共通性が見出されるという点である。

またイブン・ハルドゥーンはこれら「トルコ人」と呼ばれるマムルークの内実の多様性や，アイユーブ朝スルターンとの関係についても述べている。

> 「エジプトにおけるトルコ人の権力独占とその地におけるアイユーブ家からの独立 infirād，彼らの最初の王であるムイッズ・アイバクの王朝に関する報告」
>
> 我々が既に言及した通り，サーリフ・ナジュム・アッディーン・カーミル・ブン・アイユーブ・ブン・アーディル王はトルコ人，およびそれに類する人々であるトルコマーン，アルメニア人，ルーム人，チェルケス人などのマムルークを増員しようと欲していた。それどころか，これら［トルコ人以外］の人々の多さと優越性のゆえに，「トルコ人」の名を彼らの集団に用いるのが奇妙なほどであった。彼らのなかには，由縁ある人やスルターンの名前に基づいて選別された幾つかの集団があった。そのなかには，アズィーズ・ウスマーン・ブン・サラーフッディーンの名に由来するアズィーズィーヤという集団があった。またサーリフ・アイユーブに由来するサーリヒーヤという集団もあり，そのなかには，ナイル河の中州の二つの分岐点の間に建てられ，ナイロメーターに面した，守備隊が駐屯する城砦の名に由来するバフリーヤという集団があった。このバフリーヤ軍団はサーリフの王朝の棍棒であり，彼のスルターン位の連帯集団であり，彼の宮廷において特権的な人々であった。…(44)

以上のように，アイユーブ朝におけるマムルークもまた「連帯集団」と明記されている。連帯集団の単位に関しては(45)，イブン・ハルドゥーンは民族の単位としての「トルコ人」とその下位集団であるトルコマーンへの言及がみられる。しかし全体的な傾向として，部族以下の下位集団に関する具体的な記述は稀であり，彼らの構造

をアラブ・ベルベル諸集団のように分節的系譜集団として把握する意図はみられない。その代わりに，アズィーズィーヤやサーリヒーヤ，バフリーヤといったマムルーク軍団が連帯集団の単位として用いられている。イブン・ハルドゥーンが仕えたバルクークについても，配下のマムルークを連帯集団として言及する事例が確認される(46)。

ここまでの分析から，マムルークという集団が当初は砂漠的状態に由来するアサビーヤを有し，やがて教育と訓練を経た段階では主従関係に由来するアサビーヤによってスルターンの連帯集団へと変化することが示された(47)。とはいえ，マムルークにはそれ以前の支配集団とは多分に異なる性格付けがなされていることも事実である。さらにイブン・ハルドゥーンはマムルーク朝の創設についても，それ以前の王朝とは異なる形態を見出している。

イブン・ハルドゥーンが王朝史を記述する際には，「彼らの諸事の起源 mabādi' umūri-him」という表現を含む題名の節で始めるのが通例である。しかしマムルーク朝の場合には，「その地における［トルコ人達の］アイユーブ家からの独立 infirād-hum bi-hā 'an Banī Ayyūb」という文言が加わっている。この節では，アイユーブ朝の連帯集団であるマムルークの有力者達がアイユーブ朝最後の君主トゥーランシャーを殺害し，王権を手中にする過程が描かれている(48)。

「独立 infirād」という王朝創設の形態は，『実例の書』においては新しい形態といえる。イブン・ハルドゥーンは「序説」では，新興王朝の創設形態として，既存の王朝が老衰した時期に①地方総督が遠方で独立する場合，②近隣の民族・部族が反乱を起こす場合の二通りを挙げているが(49)，上記のケースはそのいずれにも当てはまらない。王朝が外部からではなく，内部の連帯集団によって崩壊させられたという事例はアイユーブ朝が最初なのである。この現象の重要な点は，新王朝創設の運動自体が既存王朝の中心部すなわち都市的文明のなかから生じているという点である。

最後に，前期マムルーク朝史を俯瞰的に捉えた『自伝』の記述を通じて，イブン・ハルドゥーンが王朝の諸状態の推移をいかに認識しているかを検討する。

…やがて，マムルークの一人であるバイバルス・ザーヒルが支配者となった時，カラーウーンがエジプトに到来した。…当時彼らに奢侈は見られず，勇気と活力が備わっており，勇猛さと男性らしさが彼らの信条であった。彼らに関する報告のなかで語ったように，ザーヒル・バイバルスとその後の二人の息子が死去し，カラーウーンが権力の座に就いた。…

カラーウーンの死後，ハリール・アシュラフとムハンマド・ナースィルが支配者となった。ナースィルの治世は長期にわたり，彼の連帯集団であるマムルークは増大して，とうとうどの支配者の元でも起こらなかったほどになった。ナースィルは王朝に各階級を設け，彼らをアミールの各階級に任命し，イクターと官職を拡充した。そうして彼らの俸給は豊かになり，彼らの諸状態に奢侈が蔓延した。…(50)

以上から，イブン・ハルドゥーンは，前期マルムーク期におけるマムルークと支配者の砂漠的状態から都市的状態への推移を以下のように捉えていることがうかがえる。

まず，バイバルス期までの王朝とマムルークは「砂漠的状態」にあり，奢侈や都市的習慣は現れていない。マムルークの間に奢侈の兆候が現れるのは，ナースィル（在位1293–1294, 1299–1309, 1310–1341）の支配が本格化した第二治世以降と考えられている。ナースィルは連帯集団であるマムルークを増員してイクターや俸給を拡大し，王朝の支出を増大させ，その結果として奢侈が蔓延したとされるが，これもまたブワイフ朝のムイッズ・アッダウラ，アイユーブ朝のサーリフの事例と共通する描写である。またナースィル・ムハンマド期以降の状況は以下のように描写される。

H740年の後，ナースィルが死去すると，彼の王朝のアミール達はナースィルの子孫を次々に王座に就けては傀儡とし，王権を競い合った。…それはナースィルの子ハサン・ナースィルに［スルターン位が］移るまで続いた。ハサンは自身を傀儡としていたシャイフーンを殺害して権力を手にし，王朝の手綱を自らのマムルーク・ヤルブガーに託した。ヤルブガーは統治を引き

受けたが，彼の政敵はヤルブガーに対抗し，ハサンに［ヤルブガーを排除して］スルターン自らが支配権を行使したほうがよいと唆した結果，ハサンはヤルブガーの殺害に同意した。…しかし，ヤルブガーが［ハサン・］ナースィルを殺害し，ムハンマド・マンスール・ブン・ムザッファル・ハーッジー・ブン・ナースィルを即位させた。彼はマムルークを増員し，訓練による教育，イクター，任官によって熱心に恩恵を与えた。とうとうマムルークの数はかつて王朝が知らなかった程に達した。…(51)

ここでは，ナースィル期以降の動乱の様相として，マムルーク集団がスルターンあるいはスルターン候補者を擁立して相争う状況が描かれている。こうした状況もまた，非アラブ系マワーリーがアッバース朝カリフを傀儡化し，王権を競う構図との共通性が見出されよう。他方で，アッバース朝のマワーリーとは明らかに異なる点も指摘できる。それは，マワーリーが奢侈や都市的文明の影響を受けて柔弱になったとされるのに対し，マムルークの場合は奢侈が蔓延したとされる段階以降も柔弱といった描写がみられないことである。むしろマムルークはスルターンの連帯集団として，王権をめぐる抗争を激しく展開するものとして扱われており，中央＝都市的文明における権力闘争という構造はアッバース朝のそれよりも際立っているように思われる。

このように，イブン・ハルドゥーンはマムルーク朝史の記述においては中央における権力闘争や王朝の状態の変化に焦点をあてる一方で，本来権力闘争の場であるはずの砂漠的文明，すなわち王朝の周縁部に対する関心は相対的に減少しているとみられる。マムルーク朝時代における周縁の勢力としては，例えばウルバーン‘urbān と呼ばれるアラブ系部族集団が挙げられ，彼らはしばしば王朝に対して反乱を起こしていた(52)。だがマムルーク朝史の記述では，このような周縁勢力への言及は殆どみられなくなっている。

小結論

本章では，『実例の書』『自伝』の記述を主に，イブン・ハルドゥー

ンのマムルーク朝観を俯瞰的に分析した。彼のマムルークおよびマムルーク朝観の特徴は，以下の点にまとめられる。①旧王朝の連帯集団による内部からの王朝崩壊という，『実例の書』にそれまでみられなかった形での新王朝創設。②マムルーク集団へのアサビーヤ概念適用。これらは人為的に組織された非血縁的集団であり，主従のアサビーヤを通じてスルターンの連帯集団と位置付けられる。その構成員であるトルコ人は，生活状態に由来する砂漠的性格を王朝初期には維持していた。③権力闘争の場の空間的変容，すなわち中央＝都市における連帯集団間の抗争。砂漠的文明における連帯集団の抗争・支配拡大という王朝創設の基本的プロセスをそのままマムルーク朝に適用することは不可能である。既存王朝へのマムルークの流入は，アサビーヤと砂漠的性格を有するトルコ人がマムルークとして購入されるという形で表現された。王権を巡る抗争は王朝創設時ではなく，バフリー朝中期以降のマムルーク集団間の抗争という形で疑似的に再現されているが，これは砂漠的文明ではなく，都市的文明に区分される王朝中央での事象と考えられる。

結　論

本論では，『実例の書』において提示されたイブン・ハルドゥーンの王朝論とその具体的な事例を通じて，王朝における血縁・部族的紐帯から非血縁的紐帯への変容の重要性を明らかにした。

『実例の書』において，特定の血縁・部族集団を支配者とする王朝の創設は，基本的に「序説」に基づく「部族的」モデルによって説明可能である。紐帯の喪失に伴い，支配者は外来の連帯集団との間に主従関係を結ぶが，これらも同様に支配者の連帯集団と位置付けられる。あるいは連帯集団が支配者を傀儡化し，独自の王権を有しているケースもある。いずれの場合もこの段階で中央＝都市の側に連帯集団が存在するという状況が生じる。この連帯集団はやがて独自の指導者を擁立して権力闘争を行うようになり，砂漠的状況における権力闘争が疑似的に再現される。マムルーク朝は，こうした中央における権力闘争から実際に新興王朝が生じた事例である。アサ

ビーヤは血縁・部族的紐帯から主従関係へとその形態を変えつつ，以上のプロセス全体を通じて機能している。

以上のように『実例の書』全体の記述を通じて検討するならば，アッバース朝からマムルーク朝までの王朝史の根底にもまた，一貫したアサビーヤの原理が存在するということができよう。その一方で，こうした人的結合の変容は，「序説」を最初に完成させた1377年の時点では未だ明確に構想されたものではなかったであろう。イブン・ハルドゥーンが「主従のアサビーヤ」概念を明確に強調しているのは『自伝』でマムルーク朝史に言及した箇所であり(53)，執筆時期としては比較的晩年に相当する。「序説」と前後してマグリブで執筆された第三部マグリブ史は依然として部族誌的性格が濃く，その後に執筆された第二部の初期イスラーム史もまた，支配民族であるアラブとその有力な血縁集団であるクライシュ族のアサビーヤが基軸となっている。非血縁的紐帯の強調はアッバース朝中期以降の記述に顕著な特徴であり，これは1382年のエジプト移住以降に執筆された部分と推定される。このような執筆時期・環境の違い，その間におけるイブン・ハルドゥーン自身の思想的発展が，『実例の書』の各部に異なる傾向をもたらした要因であるだろう。

参考文献

アラビア語史料及び翻訳

Ibn Khaldūn 2010: *Ta'rīkh Ibn Khaldūn: al-Musammā bi-Kitāb al-'ibar wa dīwān al-mubtada' wa al-khabar fī ayyām al-'Arab wa al-'Ajam wa al-Barbar wa man 'āṣara-hum min dhawī al-sulṭān al-akbar*, 7 vols., ed. 'Ādil b. Sa'd, Beirut: Dār al-Kutub al-'Ilmīya.

———1958: *The Muqaddimah: An Introduction to History*, 3 vols., tr. Franz Rosenthal, London: Routledge & Kegan Paul.

———1986: *Peuples et nations du monde. La conception de l'histoire. Les Arabes du Machrek et leurs contemporains. Les Arabes du Maghrib et les Berbères. Extraits des 'Ibar choisis, présentés trad. de l'arabe et anuotés par Abdesselam Cheddadi*, 2 vols., Paris: Sindbad.

———2001『歴史序説』全四巻，森本公誠訳，東京，岩波書店．

———2002: *Le Livre des exemples*; *Tome I Autobiographie Muqaddima*, tr. Abdesselam Cheddadi, Paris: Gallimard.

———2005: *al-Muqaddima*, 5 vols., ed. Abdesselam Cheddadi, Casablanca: Bayt al-Funūn wa al-ʻUlūm wa al-Ādāb.

———2012: *Le Livre des Exemples*; *Tome II-Histoire des Arabes et des Berbères du Maghreb*, tr. Abdesselam Cheddadi, Paris: Gallimard.

———2009–16: 阿久津正幸・五十嵐大介・高野太輔・佐藤健太郎・中町信孝・中村妙子・橋爪烈・原山隆広・茂木明石・柳谷あゆみ・湯川武・吉村武典訳註「イブン・ハルドゥーン自伝」1–8,『イスラーム地域研究ジャーナル』vol. 1–8: 49–58; 35–56; 47–72; 65–98; 77–102; 31–49; 40–56; 64–91.

Ibn al-Khaṭīb, Lisān al-Dīn 2003: *Aʻmāl al-aʻlām fī-man buyīʻa qabl al-iḥtilām min mulūk al-islām wa mā yataʻallaq bi-dhālika min al-kalām*. 2 vols., ed. Sayyid Kisrawī Ḥasan, Beirut: Dār al-Kutub al-ʻIlmīyah.

al-Maqrīzī, Taqī al-Dīn 1988: *al-Nizāʻ wa al-takhāṣum fī mā bayna Banī Umayya wa Banī Hāshim*. ed. Ḥusayn Mu'nis, Cairo: Dār al-Maʻārif.

al-Qalqashandī, *Qalā'id al-jumān fī ta'līf bi-qabā'il Arab al-zamān*. ed. Ibrāhīm al-Abyārī, Cairo: Dār al-Kutub al-Ḥadītha.

二次文献

Azmeh, Al-Aziz 1981: *Ibn Khaldūn in Modern Scholarship: A Study in Orientalism*. London: Third World Centre for Research and Publishing.

———1990: *Ibn Khaldūn: An Essay in Reinterpretation*. London: Routledge.

Ayalon, David 1994: "The Military Reforms of Caliph Al-Muʻtaṣim: Their Background and Consequences." in David Ayalon, *Islam and The Abode of War: Military Slaves and Islamic Adversaries*, London: Routledge: 1–39.

Cheddadi, Abdesselam 2006: *Ibn Khaldūn: al-insān wa munaẓẓar al-ḥaḍāra*. tr. Ḥanān Qaṣṣāb Ḥasan, Beirut: Maktaba al-Mashriq.

Farid Alatas, Syed 2014: Applying Ibn Khaldūn: The Recovery of a Lost Tradition in Sociology. New York: Routledge.

Fromherz, Allen J. 2010: *Ibn Khaldūn: Life and Times*. Edinburgh: Edinburgh University Press.

———2014: "Writing History as a Political Act: Ibn Khaldūn, 'Aṣabiyya and Legitimacy." *The Articulation of Power in Medieval Iberia and the Maghrib*. Oxford: Oxford University Press: 47–57.

Gellner, E. & Micaud, C. (eds.) 1972: *Arabs & Berbers*. Lexington, Massachusetts, Toronto, London: Lexington Books.

Gellner, E. 1981: *Muslim Society*. New York: Cambridge University Press.

Inān, Muḥammad A. 1941: *Ibn Khaldūn: His Life and Work.* Lahore: Kashmiri Bazar.

Lapidus, Ira M. 1990: "Tribes and State Formation in Islamic History," *Tribes and State Formation in the Middle East*, eds. Khoury, Philip S. and Kostiner, Joseph, Berkeley, Los Angeles, Oxford: University of California Press: 25–47.

Mahdi, Muhsin 1957: *Ibn Khaldūn's Philosophy of History: A Study in the Philosophic Foundation of the Science of Culture*. London: George Allen and Urwin.

Rosenthal, F. 1968: *A History of Muslim Historiography*. Leiden: E.J. Brill.

Simon, Róbert 2002: *Ibn Khaldūn: History as Science and the Patrimonial Empire*. tr. Klára Pogátsa, Budapest: Akadémiai Kiadó.

Van den Bent, Josephine 2016: "None of the Kings on Earth is their Equal in 'Aṣabiyya: The Mongols in Ibn Khaldūn's Works." *Al-Masāq* 28-2, 171–186.

Yosef, Koby 2012: "Dawlat al-atrāk or Dawlat al-Mamālīk? Ethnic Origin or Slave Origin as the Defining Characteristic of the Ruling Élite in the Mamlūk Sultanate." *Jerusalem Studies in Arabic and Islam* 39, Jerusalem: The Hebrew University, Institute of Asian and African Studies.

The Encyclopaedia of Islam, New edition, eds. H. A. R. Gibb et al., Leiden; E.J. Brill, 1960–2009.

荒井悠太 2017「歴史叙述におけるアサビーヤ：イブン・ハルドゥーン『実例』の分析」『イスラム世界』87: 1–31.

松田俊道 1993「マムルーク朝前期上エジプトにおけるアラブ遊牧民の反乱」『東洋学報』74-(1・2): 61–88.

註

(1) 『実例の書』とは，1375年以降順次執筆が進められ，1394年までに完成された全三部構成の普遍史書である（但し，それ以降も加筆・修正は最晩年まで続けられたとみられる）。前書きMuqaddima及び第一部は一般に「序説」（『歴史序説』）として独立に扱われ，イブン・ハルドゥーンの歴史学理論および「文明の学問」諸体系が収められる。第二部はアラブ・非アラブ諸集団の歴史であり，前イスラーム時代の諸集団からマムルーク朝までの歴史が収められている。第三部はマグリブのベルベル史でありハフス朝・マリーン朝までの部族史，王朝史が含まれている（詳細は荒井2017: 7–8を参照）。本論では*Ta'rīkh ibn Khaldūn: al-Musammā bi-Kitāb al-'ibar wa dīwān al-mubtada' wa al-khabar fi ayyām al-'Arab wa al-'Ajam wa al-Barbar wa man 'āṣara-hum min dhawī al-sulṭān al-akbar* (7 vols., ed. 'Ādil b. Sa'd, Beirūt: Dār al-Kutub al-'Ilmīya, 2010)を底本とする。校訂中には明記されていないが，1867年刊行のBūlāq版校訂（Ibn Khaldūn 1867: *Ta'rīkh ibn Khaldūn: al-Musammā bi-Kitāb al-'ibar wa dīwān al-mubtada' wa al-khabar fi ayyām al-'Arab wa al-'Ajam wa al-Barbar wa man 'āṣara-hum min dhawī al-sulṭān al-akbar*, 7 vols., Cairo: al-Matba'a al-Miṣrīya bi-Būlāq）を基に，修正を施したものと考えられる。Būlāq版と共通する脱落箇所については，MS. in Süleymanye Library, Damad İbrahim Paşa 863–869およびMS. in Topkapi Palace Museum Library, Ahmet III 2924を用いて補完する。「序説」に関しては同刊本の第1巻，『自伝』は*Ta'rīf bi-Ibn Khaldūn wa riḥlati-hi gharban wa sharqan*, ed. Ibn Tawīt al-Ṭanji, Cairo: Lajna al-Ta'rīf wa al-Tarjama wa al-Nashr, 1958を用いた。訳出に際してはRosenthal，Cheddadi，森本公誠，阿久津正幸他による各翻訳を適宜参照した（文献一覧参照）。

(2) 「文明の学問」の王朝論の枠組みについては荒井2017: 2–4.

(3) マフディーは「文明の学問」の構造を，文明の質料因すなわち基体substratumである経済活動や都市と，形相因すなわち文明の状態の関係性に基づき説明した。作用因はこの両者を結びつけ，文明の質的・量的・空間的変化を生起させる機能を果たす。Mahdi 1957: 232–234, 253–263.

(4) *'Ibar* I: 122.

(5) *'Ibar* I: 97–100, 101–102, 111–114, 114–115.

(6)　イブン・ハルドゥーンの理論に関する基礎研究として最も重要なものの一つであるMahdi 1957はこの傾向からかなり逃れているように思われる。その他の主要な基礎研究としてはInān 1941があるが古く，今日では更新すべき知見も多い。近年のものとしてはCheddadi 2006, Fromherz 2010, Farid Alatas 2014等。またイブン・ハルドゥーン研究史についてはSimon 2002が比較的充実している。

(7)　Gellner 1981.

(8)　Farid Alatas 2014, Chapter 6–8.

(9)　Azmeh 1981: 146–150.

(10)　*'Ibar* I: 132–134.

(11)　Lapidus 1990.

(12)　イブン・ハルドゥーンは血縁，主従に加えて盟約ḥilfもアサビーヤの要因の一つに挙げているが，筆者が『実例の書』の歴史叙述部分（巻2–7）における「アサビーヤ」の語の用例分析を行ったところ，この盟約を示す用例はきわめて少なく，質的・量的分析に堪えないと判断されるため，以下の分析では対象外とした。荒井2017.

(13)　*EI2*, "Walā'", "Mawlā".

(14)　荒井2017: 14–15.

(15)　*'Ibar* I: 134–136. ここでは人間のそれになぞらえているので'umrを「寿命」と訳出しているが，これは王朝の創設から滅亡までの期間を指すのではない。120年・三世代という期間はあくまで支配集団が当初のアサビーヤを完全に喪失し，王朝の衰退プロセスが完了するまでの期間であり，王朝が120年で滅亡するという意味ではない。

(16)　*'Ibar* I: 115–116.

(17)　マムルーク朝時代における系譜学的単位については，*Qalā'id*: 14–16.

(18)　ムアーウィヤのカリフ位の性質に関しては荒井2017: 15–17.

(19)　*'Ibar* I: 122–123.

(20)　ムウタスィム以前のアッバース朝宮廷には既にイラン系やトルコ系のマワーリー及び宦官が多数存在しており，６代カリフ・アミーン（在位809–813）と７代カリフ・マアムーン（在位813–833）の抗争においても中心的な役割を果たしていた。Ayalon 1994: 1–10.

(21)　Ayalon 1994: 1–4; *EI2*, “Mawlā”.

(22)　例えばイブン・ハルドゥーンと親交の深いアンダルスの文人イブン・ハティーブ（1313–1374）は自身の史書『傑士達の事績*A‘māl al-a‘lām*』のなかで，またマムルーク朝期の代表的歴史家マクリーズィー（1339–1442）も『議論と論争の書*Kitāb al-nizā‘ wa al-takhāṣum*』のなかで，ムウタスィムの軍制改革について似通った見方を示している。*A‘māl*: 144–145; *Nizā‘*: 108–109, Ayalon 1994: 21–22.

(23)　*‘Ibar* III: 277.

(24)　*‘Ibar* III: 416.

(25)　*‘Ibar* III: 514–515.

(26)　『実例の書』第5巻セルジューク朝史冒頭にはトルコ人の起源にかんする記述があるが，底本とした*‘Ibar* Vではp.4, 11行目fa-qarrū ‘alay-hā以下（Būlāq 1867, vol. 5ではp.3, 16行目以下）が脱落。またその後に続くトゥグリルベク治世のほぼ全体，アルプ・アルスラーン治世の一部が脱落している。Damad 869及びAhmet III 2924, vol. 9–10によって補完した。

(27)　*‘Ibar* I: 148.

(28)　民族性ethnicityを示すTurkと，奴隷軍人としての社会的身分を示すatrāk / mamlūkのそれぞれの用法についてはKoby 2012.

(29)　*‘Ibar* V: 375–376; Van den Bent 2016: 184.

(30)　*Ta‘rīf*: 315–316.

(31)　*‘Ibar* V: 373–374.

(32)　*‘Ibar* I: 144–145.

(33)　*‘Ibar* I: 122.

(34)　*‘Ibar* III: 374.

(35)　*‘Ibar* I: 146–147.

(36)　*‘Ibar* I: 122–123.

(37)　校訂ではghayrのみだが，Damad 864, fol.283bに基づきghayr-humとする。

(38)　*‘Ibar* III: 417.

(39)　*Ta‘rīf*: 315–316.

(40)　Gellner 1981: 73.

(41)　Gellner 1981: 73–77.

(42)　al-Qaṭā は地名と推定されるが，詳細は不明。キタイ al-Khiṭā の別表記か。

(43)　*'Ibar* V: 374–376; Van den Bent 2016: 184.

(44)　*'Ibar* V: 375–377.

(45)　ここで念頭にあるのは，マグリブ部族社会の特徴の一つとされる分節的構造である。マグリブにおける部族の分節化 segmentation は一般に，上位集団から順に tribe（部族）-clan（氏族）-subclan（支族）-lineage（一族）-family（家族）からなり，共通する父系の名祖をもつ。Gellner & Micaud (eds.) 1972: 28–31.

(46)　*'Ibar* V: 468, 482; *Ta'rīf*: 325.

(47)　Ayalon はマムルーク間の紐帯として同胞意識 khushdāshīya を挙げているが，この種の概念は『実例の書』にはみられない。イブン・ハルドゥーンはマムルークの強さをトルコ人の砂漠的性格に帰しており，マムルーク集団それ自体の統合原理にはさほど関心を払っていないようである。*EI2*, "Mamlūk".

(48)　*'Ibar* V: 377–378.

(49)　*'Ibar* I: 234–235.

(50)　*Ta'rīf*: 318–319.

(51)　*Ta'rīf*: 319–320.

(52)　松田1993: 68–73.

(53)　*Ta'rīf*: 314.

（早稲田大学大学院文学研究科　中東・イスラーム研究コース博士後期課程／日本学術振興会特別研究員 DC2）

［本稿は科学研究費助成事業（課題番号：19J10119）の成果の一部である］

'Aṣabīya bil-Walā': An Analysis of Non-Kin Relationships in Ibn Khaldūn's Dynastic Theory

Arai Yuta

In this article, the author reappraises the significance of non-kin ties according to *'ilm al-'umrān al-basharī* (the science of human civilization), advocated by Arab historian Ibn Khaldūn in the *Muqaddima*, an introduction and volume I of his historical work, the *Kitāb al-'Ibar*. Ibn Khaldūn's dynastic theory, which constitutes the substance of his science of human civilization, has been regarded as a product of his political experience in Maghrib society, giving him insights into its organization, and is considered to be "tribal" in character. However, after reading through Ibn Khaldūn's historical narrative, the author has found that the phenomenon of a transition from kin to non-kin ties in dominant groups is also laid out as a critical dynastic phenomenon, bringing into doubt the conventional interpretation that the theory is no more than "tribal."

Thus the author examines Ibn Khaldūn's *Kitāb al-'Ibar*, focusing on a kind of his notions of social ties, *'aṣabīya bil-walā'* (solidarity based on clientage), in order to clarify the function of non-kin ties in his dynastic theory and historical narrative. Chapter I outlines Ibn Khaldūn's historical narrative up to the Abbasid era according to his historical perspective. Chapter II examines Ibn Khaldūn's method of applying his own dynastic theory to the Mamluk sultanate, which has been considered not to conform to his "tribal" dynastic theory because its dominant group, *mamluk*s, are intrinsically non-kin and non-tribal.

In conclusion, the author argues that while Ibn Khaldūn's dynastic theory emphasizes the significance of kin and tribal ties as applied to historical dynasties in general, his historical narrative reflects the principles of transitions from kin and tribal to non-kin, which takes place in the character of social relationships in dominant groups.